



里見八犬傳

第六輯

卷五



13
709
30



門 13
號 709
卷 30



明治三六年
十月九日
購求

南總里見八犬傳第六輯卷之五上冊

東都 曲亭主人編入

第五十九回

京鎌倉小犬士四友と憶念を
下毛州赤岩庚申山の紀事

再説犬田小文吾の依介夫婦小辞一別れて市川の宿と半一ち且行徳へ立寄りて
亡西親よ起行の告別とせむとて笠をかきしめて、程なく香華院を果ふけり、
準備の籠を携へて寺門に入り、墳堂戸ありて桶索ねて汲揚る阿伽井の吊桶
籠弛み漏りて水や袖濡る。歎死の露の離歎と外の卒都婆も憫る、憂
み乗み身ひたつて、心はなごころをいへば、卷柏やぬ雨後の苔洗ひ流して手向の水
うつろふ影も死人の名をのぞき、送る石塔も対ひつ額つて、日向の時を授
けり、杖あるべし、あざむれば、稍身を起して外面へ退り、半んとて、や、萬里は逆旅

八犬傳六輯卷五上

扇良堂藏

赴地知らず投て往方もまご定めぬが繫ぬ舟の楫を絶くまへの岸もあはれ似り曩も
 犬山大塚ホホ別れ折信濃路へ走りよけんとおひいとも鬼の軍節も逢んともく
 むと東へ還りより暮月をたぬかぬかまはる今ゆら彼地小到りて索遣と欲ま
 とも船小契して送せし剣を求る小似くその甲斐の亦あべくもあはれうかまは
 何処を心當小件の四箇の支を索ん況く鬼の軍節も存亡の知る小由かし
 心以日下より心小かちハ墨田河をたぬかぬかも別れてる大坂毛野がさきこれハ
 一公胆勇智略多くゆら少年のふそが生れる里の名は犬坂をりて氏と
 ちこれが彼人も亦吾曹と同因果の犬士小あむやこの推量小違つて形状持の
 二小似る悉もあむん玉も持てん問むん知る小あはれめととまらうし小あはれども
 一ハ危窮の折りければその義小及ぶ暇なく別れ渠も往方ハ知れを送
 憾ハ小就て又ととぬかすぬ思惟る小鎌倉これ大坂が成長りける里中ハ母親の

墓あるよりかれハかの折竊小鎌倉へ立ち入りとあはれむるハ継彼小潜び難く
 今ハ他郷へ移しとも兩三月の程をればこれ且彼地小赴なくあはれ小里小拂りも
 問むか人の在処と定る知るありあむん再會の日ハ意中を告てる推量小違とかく
 同因因果の犬さる證據分明かん去歳より空小送りける月日のおは虚か
 孤雁の更小侶を得る北地ハ既歡びあむんかて大坂共侶小又大塚ホホの支を索く
 環りも會ハ石濱小抑留られ吾人を報る小平地證人あり且鬼の軍節も逢んとも亦
 一犬士と獲る伴りゆら面を具も小似り吁然也と腹裏小あひ決め引提る
 笠と鬚して遠く寺門をゆく薪樵小鎌倉を投るゆ程小次の日ハ晡時小
 既小彼地小着し米町ある客店小草鞋を解く逗留しつ日毎小巷小立出て或ハ
 茶店小見掛酒舗衆人聚小所を世の雜談小耳を敬又假初小名もあはれ人
 物小言の次小あはれ名たる女田樂且南野といふあむんそが宿所ハ何処と

外々く語りし知らずと答ふものあり又復讐の爲体と傳へるものもあれど
 忌みありと定る告むる中一箇の老人小文吾が向ふ答て索め且閑野を
 許すの人を殺せし折武藏の石濱より逐電してゆき比當所より其の
 石濱の千葉殿の官領家と疎るねあへむと告られけんとの沙汰いまだ
 ども渠もこの義を察し然る身の追捕を怖れもせぬ薪を抱き火に近づき
 久しきもあはれ虚実定るを後にも彼且閑野の女子あはれ親の冤家と
 とそ構は時より姿を変え幾万人を欺たるあ不妻一死めどもこの地よ忌
 ありし一件の情由ありとを其身のゆゑとも知らば有けん慢不渠が宿所を訊
 とも今その甲斐の地をゆゑの悪棍不疑れて支黨とて誣られぬのひ解ふ
 とどむりやう人そそお用心ありと推禁め其知る人の実意は小文吾の勿地
 曉且驚はる遂に望を失ひてあの日もむる 旅宿よたりの獨居りくもあはれ

けり里人といわれ如く現鎌倉の官領はかの千葉氏の恩家より水火送不相極中
 われは常武が懸けりも告れし人介侍も自亂邪正を辨せは是非の境も惑ひを
 取るとは河大坂を憎しとあはれ彼亂智がゆゑのさうへん云々と告て追捕を頼
 兄との議中と決りて然るをこの地におり目を送るに功ありと云ふは
 して吉以一心盡と索る人小逢人あはれ里小送憾しとあはれども去歲より三
 三方へ別れ知已の男女七人そ二人あはれと難く又何方をいふ當のきり索む
 べれ世ふものあはれありとも秋あり味十三箇月下日も胸へ休りぬれはあまの
 おひ沈むと鄙語の獨商量果しあはれ膝を抱き消す日の壁に向ひて幾遍も
 息の外ありとを勿地佐とあはれして日本六十六箇國廣しといふも限りあり
 心より足跡の至る所東西南北四維へ荒索巡らば遣人逢速小拘ると云ふと
 換せし曾の警也蒙也稍霽之も慰めりて窓の月明あはれこの地を立去る用意を

志やしもあまのくく七月の中浣あり一六やうなふひ絶く下総を望んでゆく
 程その月の廿二日あり三四日といふ日子の行徳へ着ると終案内知るる
 かね古那屋の門を入ると、とまれはひ子かひ戸を蓋籠て人影はあはれ
 いろと訝りあはれ枝る戸後小隻眼をよき裏面のやうと観ふ全く空房に
 ありるなればせんくあはれ退れぬ四鄰の人小諮るふその人答へされどよ小文吾
 どの六月下旬小辞家して遂に帰らぬ老父の安房の親族許呼とれり
 彼地をかりかき多小奴婢小中を其の暇とせしより兄弟あはれり
 とのふ現へあらをほむ介ら古那屋の通家ある市川の大江屋史異あり
 あらとゆふび向へ頭さうの掉を否大江屋へありおして幸か
 たりあふをせむる房八夫婦六月の日子ありとる揚く加えく舞見へ神
 隠しあはれんむじん往方もあはれなりとぞかればか懐妙真とのあはれ
 友も懸けしめあはれり然れど信濃路誰が相識のありと心に當はる
 めの系より往方を定めゆい何処を投ぐ索あはれ進退既度度失ひぬ中
 小文吾の鬼子筆節を相伴て脱して故郷へ還りけん往方定く知られり
 五六月の地を索めて三箇の友あり未だ且行徳へ赴け大田を執相譚ん
 これより外小了簡あはれと尋思とて彼此小旅宿を求めく索くとも一犬

志やしもあまのくく七月の中浣あり一六やうなふひ絶く下総を望んでゆく
 程その月の廿二日あり三四日といふ日子の行徳へ着ると終案内知るる
 かね古那屋の門を入ると、とまれはひ子かひ戸を蓋籠て人影はあはれ
 いろと訝りあはれ枝る戸後小隻眼をよき裏面のやうと観ふ全く空房に
 ありるなればせんくあはれ退れぬ四鄰の人小諮るふその人答へされどよ小文吾
 どの六月下旬小辞家して遂に帰らぬ老父の安房の親族許呼とれり
 彼地をかりかき多小奴婢小中を其の暇とせしより兄弟あはれり
 とのふ現へあらをほむ介ら古那屋の通家ある市川の大江屋史異あり
 あらとゆふび向へ頭さうの掉を否大江屋へありおして幸か
 たりあふをせむる房八夫婦六月の日子ありとる揚く加えく舞見へ神
 隠しあはれんむじん往方もあはれなりとぞかればか懐妙真とのあはれ

歎か身を措きてやこれ安房の親族許赴けと今ふかづ苗守あま
 高工ホと耳疎た婆々のとありと望きつと痛たをいふと告驚く現八
 それ少くもむりふ然として退けりてかてもあべはるか後か外わ
 應どく人あれく不立かへば獨思念をほふ古那屋の奥も奴真刀自
 安房あれハ親族あつて里見殿お微れあつて面箇の箱媪後安似
 たれども最心のとあだハ往方もあづはかりと親兵衛がみかんやあま
 市川あつて大江屋へ赴け尋問人と欲せるともあつてぬ苗守の宿不声訛
 たる高工耳疎た薪水の婆々何が何ぞ知るはあつてもそれむり安房あ
 たづむと邁べくもあづはるかあつてあつての舊里へ還りてをいひ大田がけあま
 親も里人中も信あつて甚不審ハ折敵不製れはせまや曳巾單節ハつと
 ぞあつてあつての問ふりもあつてあつてあつての敵地之且武藏を退け又ともか

志けれと心腹を吐向ひ腹小答へく身起せ秋の日影短くてを暁昏小
 物あつてその宵の出船小便り求めて終夜潜れく江戸に赴けあつて迷り
 たる信濃路投て日よ歩之夜小宿りの草あつて急がぬ身も旅馴く袖露
 け丸小篠原岐岨の御坂もうち過く直愛みの未い友人あつて頼り
 峯の楓葉色いませども花の浴子近つたあつてもあつて第一甲斐子王城の
 地を踏びて又何國へう赴く心行客聚ハ都會の地ハ人を索る小使り
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 名所古迹をめぐり巡る應仁以来兵火小荒じん宗とハ名名のとあつて
 似似ぬ光景あつても都の多態ハさあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 戸を張るの里巷あつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつてもあつて
 訊き今茲ハ暮れて立あつて春を旅宿小迎へたり登時現ハあつてあつてあつてあつて

路費をのり限りありぬ旅寝をせん遠謀あり後悔ありんれ年来
 習得る撃劍巻法を人教へく口を鯛に返苗中の諸雜費を省く下と
 めひければ如此くと親し人相譚ふ舊を捨てる新に附くは是れ習俗
 ありその人早の兼引くこれ彼弟子を汲引る初ハ一人ありも武藝の
 世評より随ふ門の入り教を請ふの儀へ盡しかく初りたるこの時やも
 現ハも久しく苗るるを勧めも居宅を求めた貸座敷とらひ
 めの庭を武藝の稽古所中て雨ある日虫請を随ふ弟子の宿所と起て
 幾人とも教けり勢ひかくの如くも現ハもあつた京師小枝を馬と
 既小三年不及び多り時小文明十二年（小支吾が市川あり）その月も猶り亦々星
 祀る比小あり一六過中り此を徳を現ハもある且と起出くはあつた四犬士は
 別れあり只顧索遣人とて東西百里を往復りしと圖に京師小返苗の

日教はりり今も中下歳を隔たり亦昨宵一夢小犬塚信乃ハ大八の
 親共衛と扛抱き犬山犬川犬田共侶多この旅宿のつらさを最大恨を
 以解んとあつた枕小響く鐘の音小驚覺く僕れが夜ハ尚丑の時あり此
 佛説小空く泡沫夢幻頼む不足らぬやう遺憾一も限りなく此れは
 又快くは彼五天士の異姓の兄弟骨肉小優中刎頭の交りを虚小して恨を
 らるべたれぬも路費乏し此故をめて旅宿初る弟子を聚へて武
 藝を教へく口を鯛へ名利を樂ふもの小似たり老幼順逆世小多る人の命
 期一かき命教のともも竭くこの終身あつた四犬士後小徳をくこ
 て必か現ハを誓小背地約を違へく相別れを幸ひ年来京師小住ひて己の
 名利を謀る小けりといれんや疑ひやあつた誰か然らばははは釋く
 べ死は死しとも朽るは千載不滅の遠恨とて當所を立るとゆふ東よ

赴くべし西國四國もさしはらへんが。おもひもたす友達へみか聞東て生れり遠く
 京師をこち越え西小田原へくもあつて中江親兵衛ハ神隠しあつていふ
 去々歳この地不承の比遠く大和の葛城大峯近江の愛宕高尾鞍馬深山など
 攀登りて索ひ、かゝる甲斐ありて此度いふで東海道を真直小鎌倉へ
 必しも伊勢尾張あり東中諸侯あつて割居て新関の多うれば旅人の往還
 不便のうそのひを定うかれば又近江路より中山道と下るべしとあつていふ
 必し決りて我門人の甲乙費舊里を親族より猛小招き一義ありて東國へ
 歸るこの美を送りてへへといふ人々驚なく辭を盡して禁めしが、いふ
 べくもあつたれば夏の趣云々と同門門小侍程小現八も下日もよく立去るは
 多くも衆皆別を惜む、笛別の為席を開く是首の勸盃彼首の、いふ
 るごとく招き日の多れをめて七月の過く八月迄既小半小なり、いふ現八竊よ

焦燥く頻小辞して起初る準備ハ他夏もあつたが門人ハ小苗難て錢と哀め
 銀小兒之贈りて路費の資ありとけり、いふ程小現八も行装を整へてその詰且
 門人ハ小別れて東へ歸る小苗後小跟先小立逢坂山のほとりあつて送りゆく
 もの多うり、いふやうに推首やう終小袂を分ち、いふそのぬ旅も急うれ、
 その日ハやくと十里あり守山の里小宿りを投りて、いふ程小既小日せ
 へ、いふ上野の遭坂の里まで来たけり三とを以米三回をここの山里を過れども
 あつた坂の只名のをめて、いふ友ハ遭小中もあつて、いふ荒芽山を、いふ路の程も
 遠く、いふ切の心あり、いふ焼雪夫婦が戦没の迹を、いふと雲のゆる明、いふ山
 邊小進と入ると半日中、いふ既中、いふ件、いふ山のほとり、いふ彼焼迹、いふ小
 草ハ彼此小生繁り、いふ半幹焦れ、いふ常盤木の枝を生、いふ葉を布く復采るも
 多うれ、いふ有つる家の迹を埋り、いふ住る人も、いふ忠臣孝子義姑、いふ即婦も



市と茶
 網芋の
 店子現八
 鴨平が舊
 話を聞く

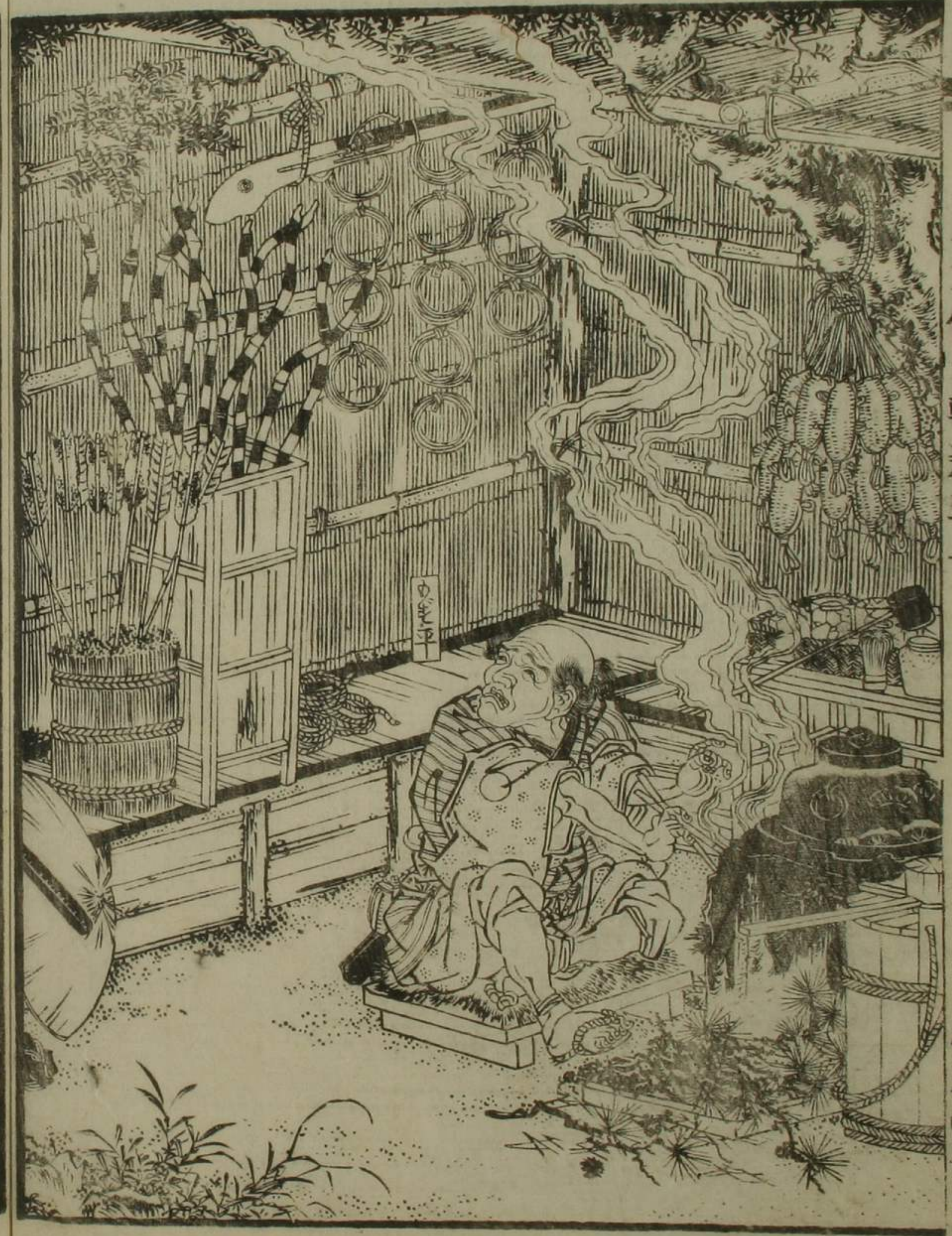


山原
 山原素肉

大飼現八

山原素肉

大飼現八



山原素肉

大飼現八

時よ遇ひ父も知らず主の爲小身を殺せども祀られぬ鬼とある迄小旅
 魂ハ身も吟呻をえいと憐むく惜むべれをひ彼をへハ別れ友を
 けれとむりおちけ徘徊しつ惆然として嗟嘆不堪ねば暮ぬ間やと舊来一
 ぢ小疾も獨路傍の茅首の露袖濡れてその夜を明の麓山の麓の白屋小
 曉を夜まから現八ゆびひさか上野よりて武藏相摸へ赴くハ是順路をれも
 去々歳の秋下総までをやゆれらればおち路へ此度ハ下野へ赴けて二荒山も
 登るべくか陸奥の盡かまも足不信しく索ある久吾四大士ハ鎌倉かど此
 繁華の地ハ多し小敷あく倚居まもあはれと尋思をゆ、次の日ハ又遭坂
 お心立よりて高崎川をりて渡り前橋大胡室深津花輪梅雨入の里と
 過る小の行程ハ二日路や下野州真壁郡細苧と喚り里小本より秋の
 日かろ尚高き小五里も六里も邁ハやくべし且くあましく憩んとあひめく程小

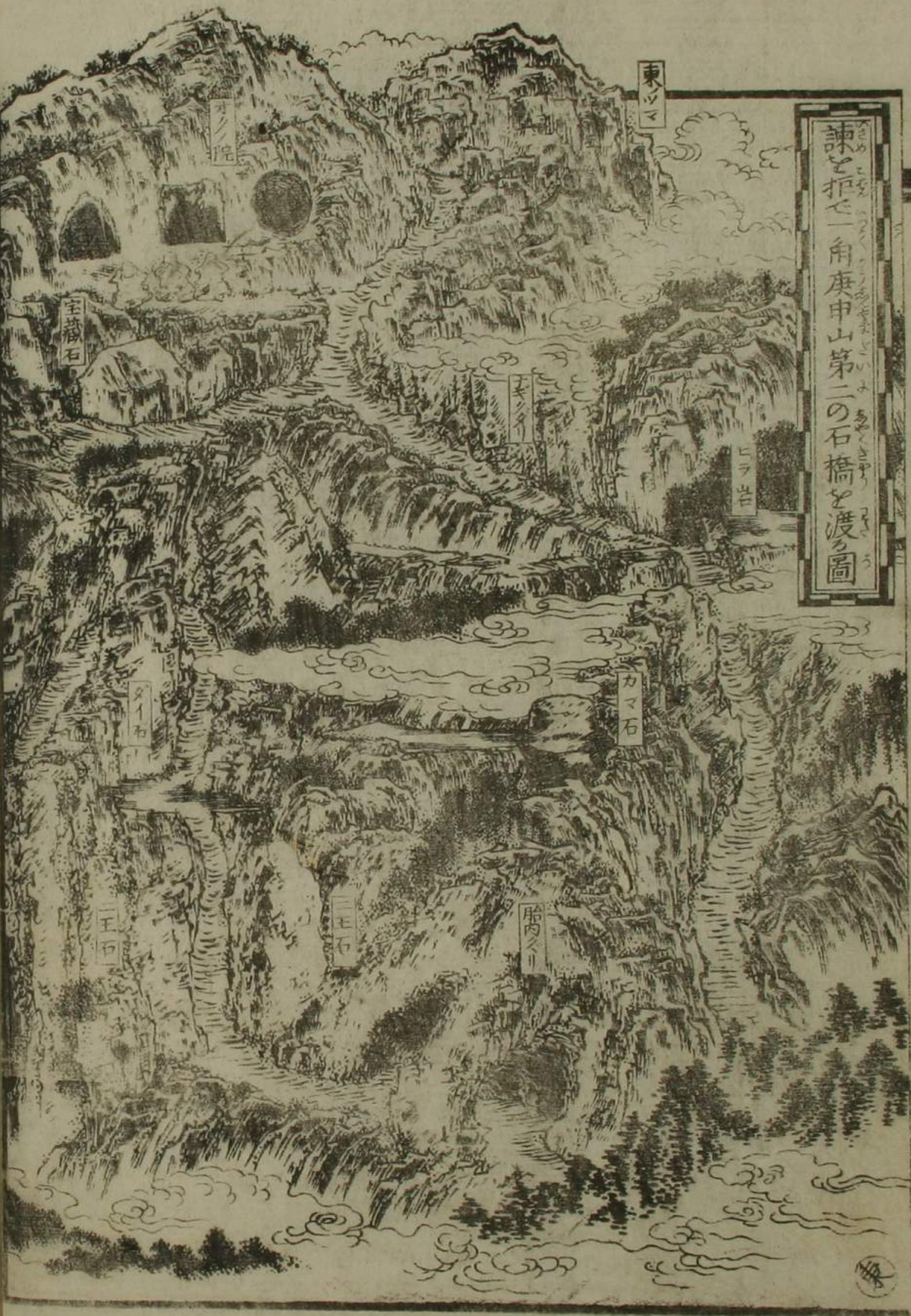
その里盡か茶店あり檐下小吊せ賣草鞋の間より之れハ一挺の鳥銃と六
 七張の半弓を傍の壁に並掛りありゆるく多ひかゞ奴解く笠を引提く凭
 ぎあり小尻をうち懸ればあやどとお海一朶の老人ゆる茶碗ふ汲ると煎茶の生
 液よりあけ涅とろふ茶釜めりて泡たせを縁の離れ日光益小乗せく
 いとて蓋るを現ハ右より取あけく両三吹喫あぐら屢後方をえよりて公羽この
 弓鳥銃ハ何のあふ掛くぞやと問へハあるハ進みありてしまご知し召れせや
 処より五六里なる里庚申山のあるこまや人煙ハと罕これ小ありて動まれば山賊
 ありて旅人を剥奪り或ハ猛獸妖怪変化小可惜命をとるや此年ハ三合も四合も
 ありこの故小白昼といふも獨りハこの里より郷導の者を備や身の衛よせ
 るこ、あつたれとも耕作よ暇あり里人ハハ件の需ふ忘しごり僕ハ素舊より足
 猪の賜平と問へハあつたれ知らぬものあつたれど、んる如く年老されば今ハ山

愈怖れく絶くやうものなりし。近屬中居松原の村間赤岩といふ地方赤岩一角
 武遠といふ箇の郷士あり心飽まを猛くして名々尚武藝の達人一日その門人ふ
 告くゆやう傳ゆく赤岩庚申山六十剣破神代は雅日靈尊素盞鳴尊孫田
 日子個三柱の大神神謨相謀ひて件の山を登らせぬ石を穿て室を造り
 碕を渡して路を通し住せぬ神迹へかくて数万歳の後皇朝早八世の女帝
 稱徳天皇の神護景雲元歲釋勝道志願依く下野州二荒山と開初
 かくるる庚申山を攀登りて彼三柱の大神を親しくおみたり世の口碑
 傳れども今七百十餘年の星霜を歴るる胎内實をもち過く件の山は
 奥の院をえんといふもの絶く。是當國の郷士として間近に住る彼高嶺の
 奥へも己盡ぬる莊客們も異形を耳怕とせぬ似たり翌の風を登山して
 教百年の蒙昧の迷ひを釋んとやめ各位も同意かか必相伴へるといふ

衆皆示れ果て鮮齊一諫をう先生の武藝勇力ゆゑ如右をいふもあひしを
 理りあつてとせむあつたねの山路は峻く且谷川不渡うけり自然の
 石橋虹の如く苔滑りて進みかごと故老の口碑傳へり加旃彼山中木精
 あり或は是數百載歷る野猫ありとの猛兇と虎の如くとの変化測るべからば
 あり謬く山中迷ひ入るものありと忽地引裂啖をいへりあれらのすの先生も
 傳へてせぬいけんされがと露をうも怕れぬはあつたねど君子の敢危邦不入
 孝子の巖壁の下を立せるといふ本文もゆゑや孝子の親をせぬと親をぬるもの
 その子のる不自愛して危殆近づく亦慈ありといふあり。みづる賢慮を回して
 おひをありぬるを願くといふせもあつたね赤岩野の呵々と冷笑く原来
 おく怯むが大約深山大澤の鬼魅妖怪もあつたねやの武術を學ぶは何のゆゑ
 昔平維茂ハ戸隠山ある悪鬼を退治し又源賴光ハ大江山の妖賊を討夷す

きのもけも還らばり多縁故を諮れば赤岩ぬ微笑きのみこれ頗り不進
 ひとり石橋を渡りて死且彼此をえたる不宝藏に似たる大石あり又二重の障
 似るもあり又屏風に似るもあり葦笥の引牛とあめ不似るもありこの餘或舟或
 金或ハ鶴亀に似る自然石の巖として立寄り裸砒とて伏せあり天造地工の
 精妙多見れども言葉不述くく画くとも筆不写し易くはこれより岩窟救
 今所あり上古居の址をべし既中て登盡まれば前面は三箇の窟室あり是
 則奥の院を駭然として向上げ屹屹と高きと二三丈隣り峽を
 その峻絶を近づくべり此の窟の形は中宮ハ□中々左ハ△右のくまを○
 かりける便是天地人の三才不象ありの状その窟口の廣はとあかく八九尺あり
 所謂雅日靈尊素盞鳴猿田日子と共ふ三神遊古鎮座の舊蹟ありん
 この窟口の神前小石猿三隻並びりその形状非禮勿視非禮勿言非礼

勿聽の三歳中く亦是自然の活石之庚申山と名つけハ蓋これ依れるの
 神祇宮の記云庚申の日小件の三神を奉拜せしりありあふ至る年来の疑念
 輒氷解して深信肝膽小銘しりこの神室を拜し果て右の方小陟ると数百
 歩の程中く東の陝ともいひべ峻峻なる山陝あり眺望尤奇絶之其処より又下る
 正九四町あまりありしてと平なる大石ありその長廿八丈高廿二丈餘りや
 建屏風ふ異あり此の平岩の断面より八町あまり東へ下れば胎内竇へ入り
 出づこれ今も来る順路を介するふきのふれ奥院をむき果て東陝より投
 降を辿りくもかへ折る雲忽地不足下り起りく晦暝瞬息暗然と野干玉の
 夜ふ異ありねばあをうつ心迷ひく平岩の断面より東へ下る後ふもへ
 諺く金石の風よりよ未申の岨路へ頻り不進く程ふも足踏を踏
 して数十俣ある溪底へ忽地墮と滾落り然れども幸ひ不底の砂礫のミ中て



八木仙舟繪

神皇正統記

水も亦膝を過ぐ右の腕を傷むるの命を恙をあれども索の絶る吊桶の
 等しく揚ぎれば弥勒の世まで出づ帰らんやわがとうくま程小日暮れて溪
 底の天を明せ六頻り飢え堪えたりつせぬと四下を尋ふ巖小岩菌の
 生るを飽まぐ採りて飢を凌ぎたりとも登る路ある歎とて彼方是方とま程
 足懸りあり処ありこの山より大藤蔓の上より長く降りりこの究竟と
 ありては故の山路ふかり今ありこままで折る折る各位の後影を遙よと呼び
 相賀して且勦る大くこつて胎内實小憇して割籠の飯の送るを
 潤乾く蓋るものもあり或は又その衣の溪水濡れく乾くを処々頼壞の
 塗たりと脱更さく瘡を勦るもありあつたれども赤岩ぬへ氣力日あろ小

異言とて衆人を勞めく途より歸り遣り門人と後着の宿所あかり
 果おれ内政の只死する人の甦生れ心地しての歡びを大かやの尚仙角太の
 天性孝心備はけん釋らるるのみありかへぬ親を思ひ居して昨夜へ睡りりるも今
 恙なくありぬ親の袂に黄縁て同慰るも可愛くこれなり親族知己里人一人かれは
 又人詣来と癖の悦びを述るものより一旬をり庚申山の物より老日を消す
 家内賑しく赤岩ぬへの剛勇を感じぬものありとぬへに懲るる気色もかく入々
 ろも對ひて件の山昔より人身怕して登らぬと山中毒蛇猛獸かく藥草奇石銀
 錫銅鉛奇石蠟石多る所の誠小海内無双の神迹実小別世界の仙境と愚接
 ちる疑りこれ神代の山陵あつたや某が誘て水溪小落ても恙なく還りしとて
 魔所をぬき各賢察せしべし今ありて後これ等し地志あるんぬら必登り
 更と鼻盡ゆりく誇るをけりこの一條に寛正五年冬十月のうかれがとひひ指

招致不歡びく取らぬものもとりあむ家も田地も入預け離衣との共侶赤岩不
 来て同居をえれど赤岩ぬへんか又彼二男の才二郎との心もよく頑言
 やく兄を兄ともあつて角太郎との恃金三方四表小機を包く内考侍を守
 れれへ人のあつて死にふんか程小離衣との今茲の夏より身もくかり一は
 彼鳩鷹の船虫が豫て伎倆一とあへ離衣との赤岩ぬと情由ありをど
 り立き血で血を洗ふ恥をむと素ありあへ死にわねども角太郎の已に
 離衣との不休書とくし媒人許預け遣一飽ぬ夫婦の別れをせし心の中
 のありは妻義理ある養家の女兒従母兄弟重頼かり一身ひらきあむ
 有身てあり既ち三二四ヶ月おつとあけり況く歎か新増ち離衣との恨み
 涙小袖の朽ちとも斬をとか死濡衣の要時浮世の笠牛より急ぐぬめとくし
 媒人小被立られははくせぬぬとせりやち猶治は角太郎のへん

おれはどのこひ戀され遂小勘當せられ大郎ありもとせり金銀調度と
 置土産小田園へ不推留れ身その戻追せし世を形かくしひけん赤岩村と大
 村の間ある田舎の字と返壁とく呼ぶ地方小草庵を締むりし貌半俗
 せりおの法師も不及と彼よりきくいふありの痛泣くは僕への初
 猶戸あり比きと赤岩師の花主之彼先生へ最大野味を嗜む八月の中お殺通と
 かく彼処へ肉ををぬれぬと商人ををり日も多り今で殺生せられぬ餘の猶戸あり
 中買して丸味くは交かをれが件の口舌の折るもあは合へるありか目あつて
 ぬりてとあり息して説誇りの花主甲斐か入事への影さる身が驚いて
 外面猛り半とあか血益やれぬ庚申山の乗歴あり真に乗してぬりぬり
 りのんを漫時と殺し未の半過るを死刃の足を駐り許すと賠話あり
 里見八代傳第六輯卷之五上終

